

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

ヒュームにおける自然 人間の本性的自然と人間 以外の自然の存在者

著者	大鹿 勝之
著者別名	OHSHIKA Katsuyuki
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	55
ページ	55-67
発行年	2019-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010631/

ヒュームにおける自然 ——人間の本性的自然と人間以外の自然の存在者——

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学

大鹿 勝之

要旨

ヒュームの議論において、自然とは、人間本性によってとらえられる自然であり、また、その人間本性が自然と理解されている箇所がある。例えば、『人間本性論』*A Treatise of Human Nature*第1巻第3部第10節で、「自然は人間の精神に、一切の行動の主要な発生と動機付けの原理として、善ないし害悪の知覚、換言すれば快苦の知覚を植え付けた」と述べられているが、このことは、人間の精神には自然に快苦の知覚が植え付けられているという人間本性のあり方を示している。では、人間以外の自然の存在は人間本性としての自然において、どのように把握されるのだろうか。口は、ヒューム的な分析が、内在的価値を人間以外の自然の存在者に帰する非-人間中心的な環境倫理学の理論を支持しうるかどうかを吟味する。口は、価値についてのヒューム的な分析を試み、そして、人々が自然の中に価値を創造するのは、人々が、対応する心理学的性向を上首尾に涵養し、内在化する場合、その場合のみ限る、という。しかし、ヒュームの議論においては、自然は人間本性によって把握された自然であり、その点で、人間以外の自然の存在者は、人間という存在の本性としての自然に依存している。

キーワード ヒューム、自然、人間本性、口、価値、人間以外の自然の存在

目次 1. ヒュームにおける自然 2. 人間本性としての自然 3. 自然における価値についての口の議論

1. ヒュームにおける自然

自然はその秘密から多大な距離を置いたところに留まらせ、諸事物 (objects) のいくつかの表面的な性質の知識しか供与しないが、その一方でそれらの事物の影響がまった

く依存している力や原理を隠していることはたしかに認められなければならない。
(Hume [1748/2000 :29])

この、『人間知性研究』 *An Enquiry Concerning Human Understanding* 第4節第2部で述べられている自然 (nature) について、人間に対して自然がその秘密を明かさないということが示されていて、上の引用箇所が続いて以下のように述べられている。感官はパンの色、重さ、堅さを知らせるが、感官も理性もパンが栄養や人体の維持に適しているという性質を何一つ教えはしない。視覚ないし触覚は、物体の実際の運動の観念 (idea) を伝えるが、運動中の物体を場所の連続的变化の中で永遠に運び続け、その物体が他の物体に伝達しない限り失うことのない驚異的な活力ないし力 (force or power) については、ほんのかすかな想念すら形成しない。しかしながら自然の力ないし原理についてのこうした無知にもかかわらず、似たような可感的性質をみるとき、それらの性質が似たような秘密の力を持っていると推測し、経験したことと類似した結果がそれらの性質から生じるであろうと期待する。以前食べたパンと同様の色と堅さを持った物体が目の前に示されたならば、躊躇なく实际的な経験を繰り返して同様の栄養と維持を予知する (*ibid.* : 29)。ここで、感官に現れる自然と、推測される自然の二種類の自然がみられることになる。感官が知らせる限りでは、パンの栄養や物体の運動は知られない。しかし、食べたパンが栄養となり体を維持することを経験すると、食べたパンと同じような物体は栄養があり体を維持すると予測し、物体の運動が他の物体に接触するまで動き続けるのを観察した経験に基づき、類似した物体が同じように運動することを予測する、このようにパンに栄養があることが知られ、物体が運動することが知られるとき、現れている自然と、現れていないが知られる自然が見いだされる。

この現れている自然と、知られる自然との関係について、ヒュームは『人間知性研究』第5節第2部において、次のように述べている。

現在の事物からの推移は、あらゆる事例において、関連づけられた観念に強さと堅固さを与える。

ここに、自然の経過と観念の継起との間に一種の予定調和 (pre-established harmony) が存している。前者が支配されている力や活力は、まったく未知であるとはいえず、しかし思考と想念はなお、自然の他の作品と同じ連続をなして進んでいったのがわかる。 (*ibid.* : 44)

ここで述べられている現在の事物から関連づけられた観念への推移については、信念 (belief) が関わっているが、信念については後述する。

ヒュームは、『人間知性研究』第2節において、精神 (mind) の一切の知覚 (perception) を活力と活気 (vivacity) の異なった程度によって、二つの種類に区別することができるといい、活力と活気のより乏しい知覚は、思考ないし観念と名づけられ、印象 (impression) という名辞によって、聞く、見る、感じる、愛する、憎む、欲する、意志するときの、一切

のより生き生きした諸知覚が意味される (*ibid.* : 13-14)。思考や観念を分析するとき、それらがどんなに複雑であろうとも、先行する感じから写される単純観念へと分解され、このような起源からかけ離れているようにみえる観念も、この起源に由来している (*ibid.* : 14)。また同書第3節において、精神の思考ないし観念の間に結合原理 (principle of connexion) が存在し、記憶あるいは想像において思考や観念が出現するとき、それらがある程度の方法や規則性をもって相互に導き合うことが明白であると述べられ、観念間の結合原理として、類似、時間あるいは場所の近接、原因と結果の三つの原理があげられる (*ibid.* : 17)。

『人間知性研究』に先立つヒュームの著作、『人間本性論』 *A Treatise of Human Nature* においては次のように述べられている。人間精神の一切の知覚は印象と観念に区分され、両者の相違は、精神を打って思惟と意識に入り込むときに伴う活力と生气にあるとされる。印象とは、はじめて精神に出現した感覚 (sensation) といったような精神が感じるものであり、きわめて勢よく激しく入ってくる知覚であり、観念は思惟ないし論考における印象のかすかな像とされる (Hume [1739-1740/2007 : 7])。印象と観念は単純と複雑に区分され、単純な印象と観念とは、いかなる区別も分離も受け入れない知覚であり、複雑な知覚は部分に区別できる。特定の色、味、香りはこのリングに統合された性質は、互いに分離できる (*ibid.* : 7-8)。黄金の舗道とルビーの壁をもつ「新しきエルサレム」のような、かつて見たことのない都市を想像することができるように、複雑観念は複雑印象の写しであることは普遍的に真でないことがわかるが、全ての単純観念はその最初の出現において、それらの観念に対応しそれらの観念が正確に再現するところの単純印象に由来する (*ibid.* : 8-9)。

また、想像 (imagination) によってすべての単純観念が分離され、想像の好むままの形に再び統合されるので、いっさいの時間や場所においてある程度一様にする普遍的原理によって導かれるのではないとしたら、想像力のはたらきほど説明できないものはないだろうと述べ、想像力ほど自由なものはないので、想像にとって不可欠ではないが、穏やかな力としてみなされるべき、通常は優勢で、とりわけ諸言語が相互に対応する原因であり、自然がある程度複雑観念に統合されるのに最も適切な単純観念を誰にも示す、諸観念間の結合原理があげられる。諸性質、観念間の連合がそれらの性質から生じ、精神がこの仕方によってある観念を他の観念に伝える諸性質は、三つ、すなわち類似、時間あるいは場所の近接、原因と結果であるという (*ibid.* : 12-13)。

この観念間の連合原理を述べている箇所、「自然がある程度複雑観念に統合されるのに最も適切な単純観念を誰にも示す」 (nature in a manner pointing out to every one those simple ideas, which are most proper to be united into a complex one) という言葉にみられる自然は、上述の現れている自然ではない。というのは、ヒュームの議論に従えば、感官に現れるパンの色や形、堅さは、過去に食べた、栄養と身体の維持をもたらしたパンと類似した、パンの複雑観念ではないからである。そのようなパンの複雑観念は、現在感官に現れ

ているパンの色や形、堅さから、過去に食べた、栄養と身体の維持をもたらした、類似したパンの色や形、堅さ、の記憶が呼び覚まされ、同様に栄養と身体の維持をもたらすとみられる複雑観念である。このように、現在現れているパンの色、形、堅さから、栄養と身体の維持をもたらすと見られるパンの複雑観念を抱くことは、「人間本性は人間についての唯一の学問である」(*ibid.*:177) というときの人間本性によるものであり、「自然がある程度複雑観念に統合されるのに最も適切な単純観念を誰にも示す」というときの自然は、人間本性としての自然を示している。

ドゥルーズは『経験論と主体性：ヒュームにおける人間本性についての試論』 *Empirisme et subjectivité: essai sur la nature humaine selon Hume*¹において、人間本性 (*la nature humaine*) は想像であるが、他の諸原理によって恒常的にされ定着された想像である (Deleuze [1980:5]) という。だが、「自然は精神にもたらされる結果の内では科学的に研究されえない」 ("La nature ne peut être étudiée scientifiquement que dans ses effets sur l'esprit") (*ibid.*: 8-9) というときは、本性と訳することもできるが、ヒュームにおいて自然を把握するときには印象に由来するので、自然と訳することもできる。

さて、ドゥルーズは、経験論を、認識が経験から生じるとする理論のように定義することは不可能であるという (*ibid.*: 122)。経験よりも所与 (*donnée*) という語の法が適切であるとし、所与に二つの意味があることを指摘する。所与は諸観念 (*idées*) の集積、経験であるが、諸観念の中での経験を超越する主体 (*sujet*)、観念に依存しない関係でもある (*ibid.*: 122)。ここでドゥルーズがいう主体というのは、知覚する独立した自我主体ではなく、人間本性の諸原理の所産のことである (*ibid.*: 122)。

ヒュームは、『人間本性論』第1巻・第4部・第6節において、いかなる時も知覚なしには自我を捉えることができず、深い眠りなどによって諸々の知覚が失われるとき、自我は知覚できないといい、もし誰かが、こうした知覚以外に自我を捉えることができるならば、彼は「彼そのもの」 (*himself*) と呼ぶところの何か単純で持続するものを知覚するかもしれないが、しかし、この種の形而上学者を別にすれば、その他の者は、途方もない速さで次々に継起する、絶え間ない流動と動きの内にある様々な知覚の束、ないしは集積にほかならない、と敢えて断言する。またヒュームは精神を演劇にたとえ、そこにいくつもの知覚が次々に出現し、そして通り過ぎ、舞い戻り、滑り去り、また無限の多様な状況や状態において混合する、とし、またその精神を組成するものは、継起する知覚であって、劇場のように数々の場面が演じられる場所の概念、またはその場所を構成する概念は、どんなに微かであろうと持つことができないと釘をさす (Hume [1739-1740/2007: 164-165])。

また、『人間本性論』第2巻・第1部・第2節において、ヒュームは自負 (*pride*) や卑下 (*humility*) という情念の対象を自我、密接に記憶し意識する、相関した観念と印象の継起とし、自負と卑下の情念のいずれかに駆り立てられるとき、視線は自我に固定し、自我が考

察に入らないとき、自負ないし卑下の余地はないという (*ibid.*: 182)。情念は内省的印象 (reflective impression) とされる (*ibid.*: 181)。印象は感覚の印象と内省 (reflection) の印象に分けられる。感覚の印象は未知の原因から原初的に起こり、内省の印象は大部分観念から来るが、それは次の順でなされる。印象がまず感官を打ってさまざまな種類の寒さや熱さ、飢えや渇き、快苦を知覚させる。この印象は模写され、印象がなくなっても残る。これが観念と呼ばれる。その快苦の観念が再び現れてくると、欲望や恐怖などの新しい印象を生み出す。これが内省の印象と呼ばれるものである (*ibid.*: 11)。『人間本性論』第2巻第1部第1節ではこの感覚の印象が根源的な (original) 印象、内省の印象が二次的な (secondary) 印象あるいは内省的印象に置き換えられ、この二次的な印象が情念 (passion) や情念に類似した情動 (emotion) であるとされる (*ibid.*: 181)。

ドゥルーズは上掲書において、主体性 (subjectivité) は内省の印象 (impression de réflexion) であるともいう (Deleuze [1980 : 8]) が、ドゥルーズの見解について説明すれば、ヒュームは、人間の精神に帰する同一性は、虚構の同一性であるとし (Hume [1739-1740/2007 : 169])、精神すなわち思考する者の継起的な存在を眺めるときに、思惟の中断のない進行が生み出される関係を、類似性と因果関係に限定して考察し、上で取り上げた三つの原理のうちの近接は、ほとんどないしまったく影響を及ぼさないとして度外視される (*ibid.*: 170)。このように精神の継続的な存在を類似性と因果関係という二つの原理から考察することにおいて、主体が諸原理の所産であるというドゥルーズの見解が理解される。また、ヒュームは、自負と卑下の情念の対象が自我であることについて、自我を対象とするように決定されるのは、自然的特性によるのみならず、原初的特性にもよるといい、この特性が自然的であることは、その作用が恒常的かつ不変であるということから誰も疑うことができず、原初的特性については、原初的と考えなければならない性質とは、魂からまったく不可分離で他の性質に還元できないような性質であり、自負と卑下の対象を決定する性質はまさにそのような性質であるという (*ibid.*: 184)。ヒュームにとって自我とは知覚の継起であるが、自我を自負や卑下の情念の対象とすることが自然的特性のみならず、原初的特性によるというとき、そのようにする自然的な傾向が示されているといえる。ドゥルーズが、自我は観念の集積であると同時に傾向であり、精神であると同時に主体でなければならない (Deleuze [1980 : 15]) ということを踏まえていえば、自我を自然的かつ原初的に自負や卑下の対象とすることにおいて、主体性が把握されるのであり、主体性は内省の印象であるという見解が理解できる。

ドゥルーズは所与に二つの意味、諸観念 (idées) の集積、経験と、諸観念の中での経験を超越する主体 (sujet)、観念に依存しない関係があることを指摘したが、そのことから、経験論は二元論としてしか定義されないといい、経験の二元性は、項と関係、知覚の原因と関係の原因、自然 (Nature) の隠れた力と人間本性の諸原理にあり、関係と項、主体と所

与、人間本性の諸原理と自然の力に、同一の種類の二元性がきわめて多様な形式で現れているという (*ibid.*: 122-123)。またドゥルーズは、ヒュームは内省の印象を定義する際に、内省の印象はあるいくつかの感覚の印象から発生するというが、その発生、その過程こそ、それら感覚の印象では説明できないという。それら感覚の印象では、なぜ集積の中で他の感覚の印象の中にありながらもそれら他の感覚の印象よりもむしろ当の感覚の印象が選ばれるのかが説明できず、内省の印象が感覚の印象から生じるためには、精神は適切な仕方ではたえられた能力を持たなければならず、精神そのものから手にしてはいない仕組み、ある本性 (*une nature*) を持たなければならぬと述べる (*ibid.*:128)。ヒュームは、精神はすべての感覚の観念を千回巡らせても、そのような熟考から精神が新しい原初的な印象を感じるように精神の能力を自然 (*nature*) が形成したのでなければ (精神の能力が自然に形成されていなければ)、感覚の観念から何らかの新しい原生的な観念を引き出すことができない (Hume [1739-1740/2007 : 29]) と述べている。

ヒュームはこの箇所では笛の五つの音が精神に何らの情動も喚起せず、精神によって観察されて新しい観念を引き起こす情緒も産まないという (*ibid.*:29) が、ドゥルーズが所与を自然の力の産出 (*le produit des pouvoirs de la Natur*) というとき (Deleuze [1980 : 122])、感覚の印象としての笛の音は、ヒュームに従えば、内省の印象が生じるように精神の能力が形成されていなければ内省の印象を産まないで、自然の力の産出は能力、本性でもある。ここにおいて、人間本性としての自然をみることができる。

矢嶋は、伝統的自然法論では、自然は人間を超えた宇宙全体を支配する普遍的法則とされ、理性を認識手段とすると考えられていたが、ヒュームはその自然を人間の立場に即して認識可能な対象として捉えなおそうとし、この作業を、人間にとって外的対象として見なされる自然を、人間に属する性質である知覚のみによって構成される対象として論じることによって行う、という (矢嶋 [2012 : 7])。パンの色、味、堅さが感官に表れても、それらがどのようなものであるかを、ヒュームのいう三つの原理、類似、近接、因果関係によってみるならば、そのパンは人間本性によってとらえられる。パンの味の観念が快の印象を引き起こし、笛の音が何らかの情念を引き起こすならば、そこには人間本性がはたらいっている。パンが知覚ではなく知覚から独立した存在である、パンから目をそらしても存在していると信じる時も、そのパンは人間本性によってとらえられたパンである。ヒュームの印象先行説からすれば、パンの色、味、堅さについての印象がなければ、パンがどのようなものであるか理解されないが、それらの印象だけではパンは理解されず、情念も生まない。ヒュームにおいて、外的自然としてとらえられる自然は、本性としての自然である。

2. 人間本性としての自然

以下、『人間本性論』にみられる、本性としての自然を主語とした文を取り上げて、その

自然について検討してみたい。

自然は、人間の精神に、善と悪、いいかえれば、苦と快の知覚を、精神のすべての作用の主な発生原理・原動原理として植え付けた。ところが、苦と快は、精神に対して二通りの現れ方をするのであり、その一方は他方と非常に異なる結果を生じる。苦と快は、印象において現実の感じや経験に対して現れることも可能であり、それらに言及している現在のように、ただの観念において現れることも可能である。これらの行為への影響がけっして等しくないことは明らかである。印象は常に魂をきわめて強く動かすが、すべての観念が印象と同様の影響力を持つわけではない。自然はこの場合、注意して進んだのであり、両極端の不都合を注意深く避けたようにみえる。もし印象のみが意志に影響を及ぼすのであったとすれば、一生の間たえずこの上ない災難の犠牲となったであろう。というのは、災難の到来を予見しはするが、それを避けるように駆り立てるような行為の原理を自然から与えられていなかったであろうからである。他方、すべての観念が行為に影響を及ぼすのであったのならば、状態はそれより大して改善されなかったであろう。思考の変わりやすさと動きのために、あらゆること、とりわけ善と悪のイメージがたえず精神のうちに漂っているので、もし精神がこの種の根拠のない想念によって動かされるのであったならば、精神は一瞬たりとも平安と平静を保つことができなかったであろう。

自然は、それゆえ中庸を選んだのであり、善と悪のすべての観念に意志を動かす力を与えはしなかったが、またそれらからこの影響力をまったく排除しもしなかった。根拠のない虚構はどんな影響力をも持たないが、存在しあるいは存在するであろうと信じている対象の観念は、程度は劣るが、感官と知覚に直接現前している印象と同様の結果を生み出すことが経験からわかる。すると、信念の効果は単なる観念を印象と等しい地位に高め、それに情念に対する印象同様の影響力を与えることである。信念はこの効果を、観念をその勢いと活気において印象に近づけさせることによって持ちうる。というのは、勢いの様々な度合いが印象と観念の間の根源的な相違のすべてをなすので、結果としてそれらの度合いがこれらの知覚の効果のあらゆる相違の源であり、この相違の全体的あるいは部分的な除去が、これらの知覚が獲得するあらゆる新たな類似性の原因であるに違いないからである。観念を勢いと活気において印象に近づけうる場合は常に、その観念は同様に精神に対する影響において印象を模倣するのであり、逆に、観念がその影響において印象を模倣する場合には、目下の場合のように、このことは観念が勢いと生氣において印象に近づくことから生じるはずである。(Hume [1739-1740/2007: 81-82])。

ヒュームによれば、ある対象の存在から他の対象の存在を推理できるのは、ただ経験(experience)のみである。この経験の本性は、以下のようなものである。ある種類の対象の存在の実例にしばしば遭遇したことを覚えており、それらの対象に別の種類の対象が常に

に伴い、また、それらの対象が近接と継起という規則的な秩序で存在したことを覚えている場合、例えば、「炎」と呼ぶ種類の対象を見たこと、「熱」と呼ぶ種類の感覚を感じたことを覚えており、また過去のすべての事例においてこれらの諸対象の恒常的接続（constant conjunction）を精神に呼び覚ますと、これ以上の手続きを何ら要することなく、一方を「原因」と呼び、他方を「結果」と呼び、一方の存在から他方の存在を推理する（*ibid.*:61）。過去における反復から何らかの新たな推論ないし推断もなしに生じるすべてのものは習慣（custom）と呼ばれるが、この習慣という起源から現前する印象に基づいて信念（belief）が生じる（*ibid.*:72）。

上の引用にみられる自然は、外的な自然が力を付与する、中庸を選んだとのように一見見受けられるが、ここでいう自然は本性としての自然である。恒常的接続はただ把握されるだけであり、恒常的接続を千回経験しようとも、一方を原因とし、他方を結果とする働きがなければ、原因、結果と呼ぶことはない。また、一切の過去の経験において、常に二つの対象が共に接続しているのを見いだしたと想定すれば、それらの対象の一つが印象に現れたとき、習慣からその対象に伴う対象の観念へと容易に移行するに違いない（*ibid.*:80）というとき、そのような移行は本性としてみられるのであり、そこから信念が生じるというのも、本性上自然に生じるのである。しかれば、自然は、人間の精神に、善と悪、いいかえれば、苦と快の知覚を、精神のすべての作用の主な原動力として植え付けたというのは、自然に植え付けられているという本性を表し、また、自然が中庸を選んだという表現は、印象でもなく、観念でもない信念が意志に影響を及ぼすという本性のあり方を表現しているといえる。

次に、物体の存在の原理について、懐疑論者はその真実を哲学によって主張することができないにせよ、その原理に同意しなければならないという箇所を引用する。

自然は、このことを懐疑論者の選択に委ねはせず、疑いもなく、不確かな論考や思弁を信頼するにはあまりにも重要すぎる事態であると見なした。どのような原因が物体の存在を信じるようにさせるのかと問うてもよいが、物体が存在するか否かと問うことは無駄である。このことは、一切の論考において当然のこととしなければならない点である（*ibid.*:125）。

物体の存在がそれを信じることに由来するならば、物体があるかどうかを問うてもおかしくはないのだが、ヒュームは、物体が存在することは当然のこととしなければならないという。どのような原因が物体の存在を信じさせるのかということについての議論は次のようになされる。

知覚する、しないにかかわらず存在するとされる外的存在は、その存在する事物の連続的存在と密接に関連する。それは、感官の対象が知覚されない時にも連続して存在し続けるとすれば、対象の存在は知覚より別個であり、また逆に対象の存在が知覚より独立・別個であれば、対象はたとえ知覚されずとも存在するに違いないからである。そうなるこの連続的

存在をどのように信じるかが判明すれば、知覚とはかかわりなく対象が存在すると信じる経過もあきらかになる (*ibid.*:126)。

この連続的存在は想像の働きによるものとされる。例えば、部屋にある家具を見、目を閉じた後に再び目を開けて見る時に、新しい知覚が前の知覚と類似していることが見出される。この類似した知覚を繰り返しているうちに、この両方の家具が同一であると想像するようになる。しかしながら、このような事物の知覚の中断はこの同一性に反対であり、そしてこれらの類似する知覚を異なるものとみなさせる (*ibid.*:129-132)。

そこでこの事物の同一性をもたらすのがこのように類似した事物を同一とする傾向(propensity)である。またこのように類似した事物は中断した知覚を連続的存在によって結合する傾向をも与える。それは、知覚の同一性を正当化して、それらの知覚の中断によって必然的に巻き込まれるとされる矛盾を避けるためだとされる (*ibid.*:138)。

だがこの連続的存在は虚構とされる。その理由は、知覚の中断という事実と反していることによる。こうした虚構をなす想像の働きによって、中断した知覚においてその前後が互いに類似すると見出された知覚に連続的存在を帰するようにさせる、とする。しかし以上の作用は知覚の中断という事実と矛盾していることは明白であり、その矛盾という点で虚偽となる (*ibid.*:139)。

ヒュームは、冷静で深い内省の後に形成する意見と、精神に対する適合性や一致のために一種の本能ないし自然な衝動によって抱く意見との間には大きな相違があるという (*ibid.*:142)。ここでは、前者は、知覚の中断により、中断の前後の知覚された物体は別個の存在とみなすという意見であり、後者は、知覚の中断があっても中断の前後の知覚された物体は同一であるという意見であるが、ヒュームは、注意が問題に傾注している限り、哲学的で熟慮された原理が優勢となるが、思考を弛めるやいなや自然が姿を現し、以前の意見に連れ戻す、それどころか自然は、もっとも深い内省の最中であってすら、進行を止めさせ、何らかの哲学的な意見の一切の帰結に同調することから遠ざけるほどに影響力を及ぼすといい、そこで知覚の非独立性と中断を知覚しても、進行を止めて、その理由で独立した連続的な存在の考えを斥けることはしないという (*ibid.*:142)。すなわち、知覚の中断があっても中断の前後の知覚された物体を同一とする傾向に反する哲学的な意見は本性上斥けられるということであり、ここにおいて、上の引用にみられる、自然は、このことを懐疑論者の選択に委ねはせず、物体が存在することを当然としなければならない、という言葉が理解できる。ここでいう自然とは、外的な存在を信じる本性である。

3. 自然における価値についての口の議論

以上、ヒュームの議論における人間本性としての自然のあり方をみてきた。では、人間本性から人間以外の自然はどのようにとらえられるのだろうか。

ロ (Y. S. Lo) は、ヒューム的な分析が、内在的価値 (intrinsic value) を人間以外の自然の存在者に帰する非-人間中心的な (non-anthropocentric) 環境倫理学の理論を支持しうるかどうかを吟味する (Lo [2006 : 123])。内在的価値とは、事物が、他の目的に対する手段としても役に立つかどうかに関わりなく、事物そのものにおける目的として持つ価値である (*ibid.*:124)。

ロはヒュームの観察者 (spectator) あるいはヒュームが思慮分別のある観察者 (judicious spectator) と呼ぶもの (Hume [1739-1740/2007 : 371]) は一連の条件を満たさなければならないといい、最初の条件を挙げる。

C1. 評価のもとにある対象に対する一切の状況や関係を意識しているという条件 (対象意識条件) (Lo [2006 : 128])

この条件について、ヒュームが『道徳原理研究』*An Enquiry concerning the Principles of Morals*で述べている一節を引用する。

道徳的な決定に際して、一切の状況や関係が前もって知られていなければならない。そして精神は、全体の熟考から、情愛ないし嫌悪、尊重ないし軽蔑、賞賛ないし非難の新しいいくつかの印象を感じる。((Hume [1751/1998 : 86])

また、ロは一般的観点についてヒュームが述べる一節に着目する。

遠く離れたところにいる人が、少しの間に、親しい知人になることがあり得る。加えて、すべての人が、一人一人他の人々に対して特有の位置をもつのであり、それぞれが諸々の性格や人物を各人に特有の観点からみえるかたちで考察するだけなら、理にかなった語でともに会話することはおよそ不可能であろう。それゆえ、そのような絶えざる矛盾を防ぎ、物事についてより一定の判断に達するために、何らかの安定した、一般的観点 (some steady and general points of view) を定め、現時点での状況がどのようなものであっても、思考のうちでは常にその観点に置くのである。(Hume [1739-1740/2007 : 371-372]、引用文傍点箇所は原典イタリックの箇所)

この安定した、一般的観点を受け入れることは以下の条件を満たすという。

C2. 人間本性について意識しているという条件 (人間本性意識条件) (Lo [2006 : 129])

C3. ある者の特定の関心や関係があったとしても、評価のもとにある対象に対し、それらの関心や関係を第三者がみる仕方で見るとする場合で考察する、非-自己中心的な条件 (非-自己中心性条件) (*ibid.*:130)

ロはこれらC1からC3までの条件がともにヒュームの価値理論において重要な役割をなすといい、有徳であることや悪徳であることについてのヒュームの概念分析は以下のように要約されうるといふ。

H. ある行為ないし性格が有徳である／悪徳であるのは、C1、C2、C3の条件のもとで、人間がその行為ないし性格に対して賞賛／非難の感情を持つ傾向がある場合、その場合

にのみ限る。(ibid.:130)

またより一般的なヒュームの分析は以下のように示されるという。

H*. Xが(相対的／普遍的に)価値がある／価値がないのは、(いくつかの／いっさいの)人間という主体がXに対して、C1、C2、C3の条件のもとで賞賛／非難の感情を感じる傾向がある場合、その場合にのみ限る。(ibid.:131)

そして、ラウトレッジ哲学事典に示されている、価値についての客観主義が「価値が、人間の関心に特徴的に適合されたカテゴリーではなく、人間の関心から独立して存在する」という見解として記述されていることを取り上げ、この意味でヒュームの価値は客観的であるという。H*を考慮すれば、Xが価値があるということは、人々が理想的な条件、C1、C2、C3の条件にあるならば、あったならば、あったとしたならば、Xに対する賞賛の感情を感じるだろう、感じただろう、感じたことであろうという条件言明を主張することと等値である。この条件の主張は、誰も実際にXに対して賞賛の感情を持っていないにしても真でありうる。というのは、誰も現に確かな感情を与える理想的な条件に遭遇していなくとも、これらの条件に遭遇したとするならば、Xを賞賛したであろうということは事実であるだろうからである。ゆえに、現実には人々からの賞賛を欠いていることは、Xは価値がないということを含意しない。H*は、評価主体の肯定的な評価の反応がなくても価値は存在し、事物は価値づけられることなしに価値がありうるということを許容する。すなわち、ヒュームの価値は存在論的に客観的なのである (ibid.:131-132)。なお、H*は主体の点からみて価値を分析していて、価値は主体に概念上依存しているから主観的でもあるという (ibid.:132)。

また、ロは、環境に有徳な人物がヒューム的な条件のもとで感じる傾向にある様々な道徳感情は、環境に対して有徳に振る舞うように動機づけ、さらに、H*を考慮すれば、環境に有徳な人物がヒューム的な条件のもとで、非-道具的に自然環境やその環境の様々な人間以外の生息物の保存を賞賛する傾向にあるという事実は、事実上、それら自然の人間以外の存在者が、内在的に価値があるという道徳的事実を構成するといい、それゆえ、諸々の環境的徳 (environmental virtues) についての非-人間中心的な感覚の涵養と内在化は、環境に親愛的な振る舞いを産むだけでなく、自然環境における内在的価値を創造するという (ibid.:140-141)。ロの議論によれば、H*を考慮すれば、(相対的／普遍的) 内在的価値が自然の中に存在するのは、事物、(ある／すべての) 人々がヒューム的な条件のもとで、それらの事物に対して賞賛の道徳的感情を経験する傾向にあるような事物が自然の中に存在する場合、その場合のみであり、同様に、人々が自然の中に(相対的／普遍的) 価値を創造するのは、(ある／すべての) 人々が、対応する心理学的性向を上首尾に涵養し、内在化する場合、その場合にのみ限る、ということになる (ibid.: 141)。

自然の中に内在的価値が存在するというときの自然、人間以外の自然の存在がどのように把握されるかという、ヒュームの議論においては人間本性によって把握されるのであり、

その点で、人間以外の自然の存在は、人間という存在の本性としての自然に依存している。ロは環境的徳についての非-人間中心的な感覚の涵養と内在化が、自然環境における内在的価値を創造するというが、ロの議論を踏まえていえば、自然界や自然界に生息する人間以外の存在者を目的そのものとして賞賛する自然の傾向が、人間という存在に付与されていなければ、人間以外の存在の内在的価値や道徳的地位を議論しても無駄なことになる。したがって、人間という存在の本性としての自然をどのように理解するかによって、人間以外の存在のあり方が理解されることになる。

註

¹邦訳〔2000〕の書名は『経験論と主体性：ヒュームにおける人間的自然についての試論』であるが、英語のnatureや仏語のnatureは「自然」という語義もあれば、「本性」という語義もある。ドゥルーズは「連合（l'association）とは一つの自然法則であり、あらゆる法則と同様に、その結果によって定義されるのであって、ある原因によって定義されるのではない」（Deleuze〔1980：6〕）というとき、自然法則（loi de la nature）は本性の法則ととれるが、自然の意味合いも込めているようにもみえる。

引用文献

Deleuze, Gilles. 1980/2000: *Empirisme et subjectivité: essai sur la nature humaine selon Hume*, 3^e édition, Paris: Presses Universitaires de France.

『経験論と主体性：ヒュームにおける人間的自然についての試論』、木田元、財津理訳、河出書房新社。

Hume, David. 1739-40/2007: Norton, David Fate; Norton, Mary J. (eds.), *A Treatise of Human Nature*, Vol. 1: Texts, *The Clarendon Edition of the Works of David Hume*, Oxford: Clarendon Press.

Hume, David. 1748/2000: Beauchamp, Tom L (ed.), *An Enquiry concerning Human Understanding*, *The Clarendon Edition of the Works of David Hume*, Oxford: Clarendon Press.

Hume, David. 1751/1998: Beauchamp, Tom L (ed.), *An Enquiry concerning the Principles of Morals*, A Critical Edition, *The Clarendon Edition of the Works of David Hume*, Oxford: Clarendon Press.

Lo, Y. S. 2006: "Making and Finding Values in Nature: From a Humean Point of View," *Inquiry*, Vol. 49, No.2, April.

矢嶋直規 2012;『ヒュームの一般的観点：人間に固有の自然と道徳』、勁草書房。

Hume on Nature: Human Nature and Natural Nonhuman Entities

OHSHIKA, Katsuyuki

According to Hume's arguments, nature is not the external being out of human nature, and nature signifies human nature in Hume's texts. For example, Hume says "Nature has implanted in the human mind a perception of good and evil, or in other words, of pain and pleasure, as the chief spring and moving principle of all its actions" (*A Treatise of Human Nature*, Book 1, Part 3, Section 10). This passage is interpreted "There is implanted naturally in the human mind a perception of good and evil." In this passage, nature means human nature. And the secrets of nature are known by human nature in Hume's arguments.

How natural nonhuman entities are evaluated in human nature? Lo investigates whether the Humean analysis can support non-anthropocentric environmental ethical theories, which attribute intrinsic value to nonhuman natural entities. He puts Humean analysis of value and disvalue, and he says, given Humean analysis of value and disvalue, the fact that the environmentally virtuous person is disposed under the Humean conditions to non-instrumentally approve of the preservation of the natural environment and its various nonhuman inhabitants, in effect, constitutes the moral fact that these natural nonhuman entities are intrinsically valuable.

. However, in Hume's arguments, these natural nonhuman entities are known by human nature, therefore, the values of these entities depend entirely on human nature. These values are varied in the manner of understanding human nature.

Keywords: David Hume, Nature, Human Nature, Y. S. Lo, Value, Natural Nonhuman Entities